

⑫ 公開特許公報 (A) 平2-186924

⑬ Int.Cl.⁵A 01 G 13/02
7/06
17/00
// B 65 D 85/52

識別記号

101

庁内整理番号

8003-2B

E 8602-2B

6852-2B

G 7405-3E

⑭ 公開 平成2年(1990)7月23日

審査請求 有 請求項の数 2 (全4頁)

⑮ 発明の名称 果実などの実入瓶とその製造方法

⑯ 特 願 平1-4753

⑯ 出 願 平1(1989)1月13日

⑰ 発明者	高橋 幸雄	千葉県鎌ヶ谷市南鎌ヶ谷4-6-63
⑰ 発明者	飯濱 正	千葉県船橋市藤原町3丁目425番地115
⑰ 出願人	高橋 幸雄	千葉県鎌ヶ谷市南鎌ヶ谷4-6-63
⑰ 出願人	飯濱 正	千葉県船橋市藤原町3丁目425番地115
⑰ 代理人	弁理士 西村 敏光	

明細書

1. 発明の名称

果実などの実入瓶とその製造方法

2. 特許請求の範囲

(1) 内空部が口部より大径になっているガラス等の透明または半透明、着色透明な瓶内に、その口部の径よりも大径の果実、野菜等の実が入れられて構成されることを特徴とする果実などの実入瓶。

(2) 果樹等の開花後の所定期間内に摘果、摘粒等を行った後の残留幼果を、内空部の径が口部の径より大径の透明、または半透明、着色透明な瓶内に、その口部から挿入し、その瓶の内空部で上記幼果を生育栽培させて収穫することを特徴とする果実などの実入瓶の製造方法。

3. 発明の詳細な説明

【産業上の利用分野】

本発明は、果実などの実入瓶とその製造方法に関するものである。

【従来の技術】

従来、瓶細工と称して内空径が口径より大きい瓶内にその内空と略同容積の細工作品を充填して置き物としたものが存在する。

この瓶細工は、一般にその瓶を予め肩部または尻部で分割しておいて、細工作品を挿填した後、その分割部分を突き合せ、加熱溶接で一個の瓶に調整製造するものである。

【発明が解決しようとする課題】

しかし、その細工作品に代えて瓶内に果実などの実を充填するときには、瓶の調整製造方法が加熱溶接による分割部の突き合せであることから、実が傷み、置き物あるいは果実酒としての商品価値が失われる。

本発明は、このような従来技術の問題点を解決するためになされたもので、果実などの実に損傷を与えることなく、鮮度を保持した状態の実が入っている果実などの実入瓶とその製造方法を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

上記目的を達成するための本発明を、実施例に対応する図面を参照して説明すると、本発明は、第一に、第1図に示すように内空部が口部(3)より大径になっているガラス等の透明または半透明、着色透明な瓶(1)内に、その口部(3)の口径(d_1)よりも大径(d_2)の果実、野菜等の実(4)が入れられてなる果実などの実入瓶(5)であり、第二に、この実入瓶(5)を製造するために、第5図に示すように果樹等の開花後の所定期間内に摘果等を行った幼果(6)を、内空部(2)の径(d_1)が口部(3)の径(d_2)よりも大径の透明または半透明、着色透明な瓶(1)内にその口部(3)側から挿入し、その瓶(1)の内空部(2)で上記幼果(6)を生長栽培させて収穫することを特徴とする。

【作用】

第一の発明によれば、口部(3)の径(d_2)が内空部(2)の径(d_1)よりも小さい瓶(1)内にその口部(3)の径(d_2)よりも大径で形のよい自然の果実等の実(7)が入った謎を問いか

裝されている。

この瓶(1)は、ガラス、プラスチックなどからなる透明体または半透明体、着色透明体からなる。

そして、この瓶(1)の形状は、上記内空部(2)と後口(3)を具有する他、外周が絞られて再び拡径する底部(8)を具有し、底部(8)と内空部(2)の間の外周が溝部(20)となっている。口部(3)には、蓋体(9)が冠着されている。

第2図A、Bは、実入瓶の変形実施例の正面図と側面図を示す。

この変形実施例の実入瓶(5)においては、瓶(1)が内空部(2)の形状が、口部(3)よりも大径であるが実(4)より小径の角形又は丸形の上下の部(10a)、(10b)と、この筒部(10a)、(10b)の途中に膨出する実(4)と略同径の挿入部(11)とを具有し、この球体部(11)内に実(4)が嵌装されている。

けつつ置き物として利用され、また、その瓶がそのまま果実西用の保存容器として利用される。

また、第二の発明によれば、果実等の袋かけをする時期に、幼果(6)が瓶(1)の口部(3)から内空部(2)に臨むように挿入して、かつその瓶(1)を保持し、その幼果(6)を外部から囲みながら、その内空部(2)で生長肥大化させて成熟実(4)とし、収穫期に、その瓶(1)の保持を解除し、同時に、その内空部(2)に収容されたままで成熟実(4)を果樹(7)の枝からとる。

【実施例】

以下、本発明の実施例を図面を参照しながら詳述する。

第1図は、本発明の果実などの実入瓶の側面図である。

図示するように、内空部(2)の径(d_1)が口部(3)の径(d_2)よりも大径になっている瓶(1)の、その内空部(2)に上記口部(3)の径(d_2)よりも大径(d_3)の梨の実(4)が嵌

装されている。この変形実施例によれば、実(7)によって筒部(10)が膨らませられているよう見える。

実(4)は、梨、桃、リンゴ等の果実の他、ブドウの房をも含み、さらに、トマト、カボチャなどの野菜をも含む。

なお、瓶(1)は、口部(3)のスペースが内空部(2)のスペースより狭いことを条件として瓶以外の容器に代えることもできる。

次に、上記実入瓶(5)の製造方法を説明する。

一つの花芽から6~8個の花が咲いて、ほとんど全部結実した幼果は、開花後30日以内に摘果されるのが、日本梨においては一般的である。その摘果を行った直後、有袋栽培(主に20世紀)においては、袋かけを行う。本発明の実入瓶(5)の製造方法では、有袋栽培、無袋栽培(いわゆる赤ナシ)を区別せず、第5図に示すように上記の瓶(1)を逆さにネット(12)から溝部(20)においてワイヤー(13)を介してぶら吊りて、その口部(3)から幼果(6)を挿入し

その内空部(2)に臨ませる。

この幼果(6)は、主幹(14)から整枝された主枝、亜主枝(15)に良好な配置でせん定された長果枝、短果枝の枝(16)に結実したものである。

逆さになっている上記瓶(1)の尻部(8)上には、直射日光を遮るためにビニール・アルミなどのキャップ(17)が冠着されて自然栽培時における果そう葉と同様の保護機能を営むよう配慮され、逆さになっている上記口部(3)は水が溜らず、直射日光のみ遮えぎる覆い(18)がされている。

このように、瓶(1)の口部(3)から内空部(2)に臨むように瓶かけ保護される幼果(6)は、果肉が肥大生長するに伴って、その内空部(2)に向け進出膨大し、収穫期には、果実(4)の径(d_1)がその内空部(d_2)の内径と略同長まで生育する。

このように生育して熟成した梨等の実(4)は、収穫期に、瓶入りの状態で果梗(19)を枝

さらに、本発明の実入瓶の製造は、農業的生産過程を利用するので、農家に新たな収入源を提供し、過疎地の村おこし運動にも一役貢献する。

4. 図面の簡単な説明

第1図は本発明の実入瓶の側面図、第2図A、Bは同上実入瓶の変形実施例の正面図と側面図、第3図は同上実入瓶の製造方法を説明する梨の一つの基本樹形の概要側面図、第4図は同上基本樹形の概要平面図、第5図は第3図V矢視部の拡大図である。

(1)…瓶、(2)…内空部、(3)…口部、
(4)…実、(5)…実入瓶、(6)…幼果。

特許出願人 高橋孝雄
飯浪正
代理人・弁理士 西村教光

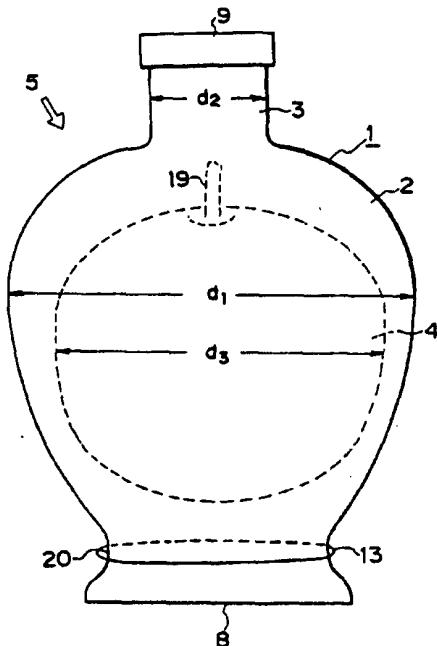
(16)からもぎ取り、かつ、瓶(1)をネット(12)から解除し、収穫収納する。

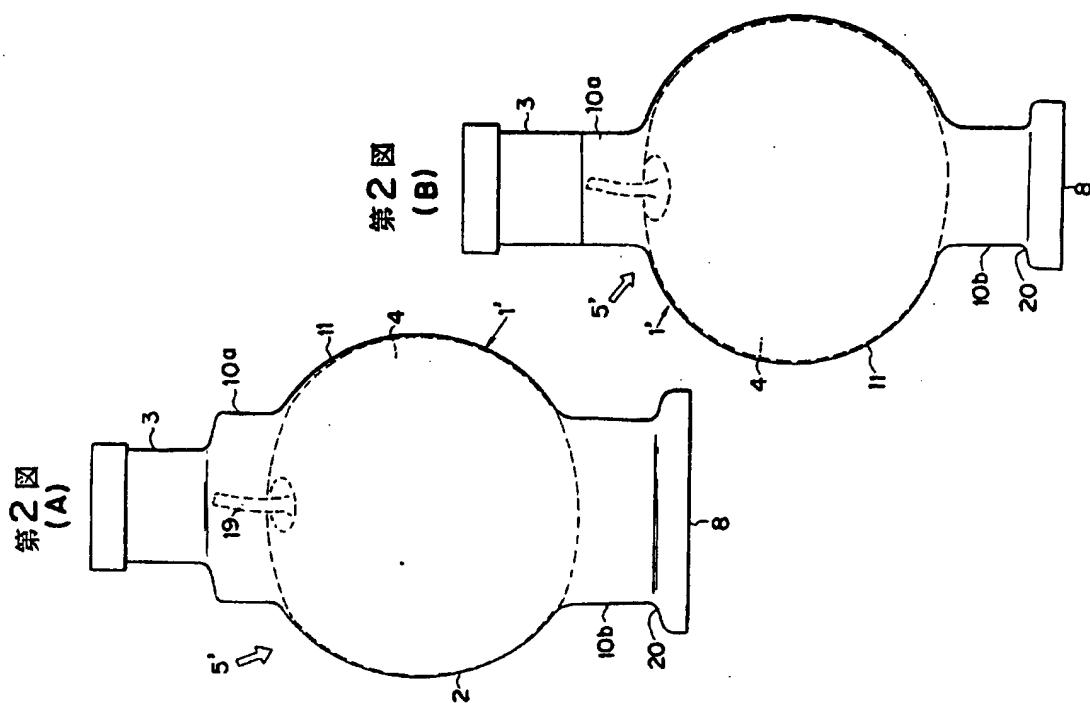
このように収穫収納された実入瓶(5)は、尻部(8)のキャップ(17)が除去され、口部(3)に所定の蓋体(9)が冠着され、第1図に示す商品としての実入瓶(5)に仕上げられる。この実入瓶(5)は、そのまま置物として利用することが出来、またアルコール類を注入して果実酒とすることも出来る。さらに、実入瓶(5)と氷砂糖及びアルコール類をセットとして販売することも出来る。

【幼果】

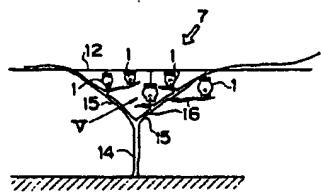
以上述べたように、本発明の実入瓶においては、内空部が口部より大径になっている透明または半透明、若色透明な瓶内に、その口部の径よりも大径の果実、野菜等の実が入れられているので、珍しい土産品としての商品価値があり、置き物としての装飾、鑑賞の価値があり、さらにそのまま果実酒等としてその瓶内に保存できるなどの効用がある。

第1図

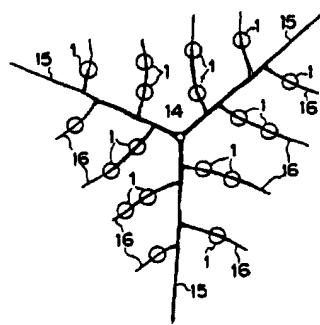




第3図



第4図



第5図

